

質問 8-1 大戸川流域において、昭和 28 年 8 月の集中豪雨で 44 名の死者が出たのは、最上流部の信楽町(当時)多羅尾の山崩れによる土砂災害です。このような土砂災害はダム建設によって防げるのでしょうか。

被害を最小化する災害対策と言うならば、そもそも被害の実績を調べ、その原因を取り除くという方法を取るべきであり、被害実態に即した水害対策を実施するべきではないでしょうか。

(回答)

- ダム上流における被害についてはダムによって回避することはできませんが、大戸川本川のダム下流部で破堤が確認されている、昭和 28 年台風 13 号洪水、昭和 57 年台風 10 号洪水について、大戸川ダムの効果を検証したところ、大幅に氾濫は軽減されることが可能となります。
- 災害実績に着目してその原因を取り除く努力をすることは当然ですが、実際に被害が発生していなくとも被害が発生する可能性のある箇所これまで運良く被害が生じていなかった地域にも着目することが重要です。大きな地震が発生していない地域においても想定される地震による被害を想定して防災に対する意識を高めることが重要であるのと同様に、水害についても実績被害だけでなく想定被害にも着目し、住民の防災意識の向上や流域治水を含む予防保全的な対策を検討・実施することが重要です。

※本質問は、平成20年8月25日に開催された滋賀県議会「琵琶湖淀川水系問題対策特別委員会」において、滋賀県から寄せられた質問に対して近畿地方整備局から回答した内容を中心に整理したものです。なお、現在は時点更新も含め内容を精査しており、最新の情報ではない場合があります。